

# 司馬遼太郎の世相論

その「保守精神」の顕在化

王 海

Shiba Ryōtarō's View of Japanese society

WANG Hai

## Abstract

Quite a lot of Shiba Ryōtarō's essays have been confirmed at *Osaka Shibun* in the early 1950s. Several texts are found at the same newspaper in 1960's as well. Two ideas were made sure. *Osaka Shibun* is the most important place for early Shiba. Moreover, Shiba still pays great attention to the society while he left the newspaper company. Shiba's essays were organized in a column called "colorful aspects of society". The other columnists, however, focus on the changes of life style improved by the economy growth. But Shiba claimed that people involved in material civilization fail to keep the sense of history. In his words, "conservatism is more essential than destruction", we can see Shiba's idea has greatly changed.

**Key words:** 大阪新聞 世相アラカルト 反世相 保守精神

## はじめに

1960年1月、司馬は『梟の城』で直木賞を受賞してから小説家としての素質が認められる。それまで「福田定一」「風神」「司馬遼太郎」といった著者名、筆者名で記事を執筆してきたが、1960年1月からもっぱら「司馬遼太郎」というペンネームを使うようになった。この意味で、直木賞は司馬が新聞記者から小説家に転身するシンボリックな事件と言っていい。事実、1961年司馬は出版局次長をもって産経新聞を退社し、同社の社友となる。それ以降短編小説だけでなく、『上方武士道』『新撰組血風録』、さらに代表作である『竜馬がゆく』などの長編小説をぞくぞくと発表し、やがて歴史小説家としての全盛期を迎えようとする。

とはいえ、当時の司馬自身はかならずしもこの転換を積極的に受け止めなかった。それまで司馬は新聞記者という「サラリーマン職業」に満足し、小説は「趣味」「娯楽」にすぎないと何度も述べたことがあり<sup>1)</sup>、親交のあった富士正晴、藤沢桓夫も「彼（司馬、筆者注）は小説を書くつもりだという気配もみせなかった」と証言したことから<sup>2)</sup>、小説家としてのスタートは、司馬自身にとって容易な切り替えではなく、むしろ心の準備がない急な出来事であり、また周囲にとって驚きの事件だったと言えよう。60年代前半における自己認識について、司馬は次のように述べる。

私は、あくまでも時代小説の作家のつもりだが、日常の関心は現代への興味をおさえきれない。当然かもしれない。ほんのこのあいだまで、私は新聞記者という職業を通じ、こんにちの人間現象を相手にごはんをたべてきたからである。<sup>3)</sup>

「新聞記者」と「小説家」という自己認識が混在しているという告白だが、司馬は「新聞記者」として、「こんにち」の「人間現象」への観察は、小説家としてスタートする重要な接点を果たしたというのである。「四六時中、何がニュースになるかと考えあぐね観察しあぐね、朝起きれば他紙の朝刊を死の宣言をまつような気持ちでひろげ、万が一にもヌカレやしないかと眼を血走らせて読みあさる」<sup>4)</sup>という司馬の50年代の記者感覚とはさほど異なるものだ。このように、1960年代前半期の司馬を理解するため、「小説家」というよりもむしろ「新聞記者」としての社会認識を前提にすべきではないだろうか。

1) 「この本を読んで下さる読者の方に」『名言随筆 サラリーマン金言』（六月社、1955）pp.6-10

2) 富士正晴「司馬遼太郎の世界」『富士正晴全集3』（岩波書店、1988年）p427、藤沢桓夫「若き日の司馬君」『月報3』『司馬遼太郎全集11』（文芸春秋、1971）pp.21-22

3) 「作者のことば」『司馬遼太郎が考えたこと2』（2001年、新潮社）p21、初出『主婦の友』第四十五巻第十一号、1961年11月

4) 『司馬遼太郎が考えたこと1』『影なき男』（新潮社、2001）p46、初出『大乘』第六巻第五号、1955年5月

筆者は1950年代前半における司馬の文献が乏しいと論じたが、1960年代前半の文献状況も依然満足できる状況ではない。当時の司馬の文章を収めた『司馬遼太郎が考えたこと2』（1961-1964）においても、時代・歴史小説に関する話題が圧倒的に多い。その中で司馬の社会認識に触れる文章が散見されても、体系的に検討することは大きく制限される。筆者はこれまで「風神」の未収録文章を大量に発掘したことをきっかけに、その掲載先である『大阪新聞』が司馬の言論の重要な場所であると想定した。1960年代前半の『大阪新聞』も筆者の期待を裏切っていない。同紙第二頁で新設された「世相アラカルト」コラムで、司馬が1962年8月1日から翌年3月26日まで、計33点の文化評論を寄せたことを明らかにした<sup>5)</sup>。新資料が発掘されたというだけでなく、これらの文献は次の三点において重要である。

①司馬の内面世界が窺えること。「世相アラカルト」において司馬は自分の生活範囲、習慣から自己の性格まで多く披露するからだ。それまでの文献では見られない司馬の内面世界の表露である。1961年新聞記者をやめたため、司馬はより自由に執筆できたと考えられる。

②司馬の社会認識が大量に現れること。「作家」という肩書にも関わらず、司馬は自分の歴史小説にほとんど言及しておらず、むしろ現実社会の「人間現象」について多く発言している。『司馬遼太郎が考えたこと』と比較すれば、大きな特徴と言える。

③思想的展開がを跡づけることが期待されること。「風神」時代の文章に基づき、筆者は初期司馬における地域主義と民主主義の形成について論じたが、戦後激動した社会状況に伴い、司馬の思想も変化を生じるはずである。「世相アラカルト」コラムにおける司馬の33点の寄稿は、司馬が直面している社会状況、またそれに対するコメントが大量に掲載されているという意味で、貴重な一次資料群と言えよう。

## 第一節 高度成長初期の『大阪新聞』

1950年代日本の大勢は「政治的季節」と言われる。イデオロギー論争、占領と独立、保守と革新、政治と文学、逆コースなどといった政治闘争が盛んに行われ、特に1958年新安保条約の調印をめぐって、日本全国は争乱の渦に巻き込まれる。安保で岸信介政権が倒れると、1960年池田勇人内閣が発足した。それまでの政治的論争となりうる課題を極力避け、「所得倍増」をスローガン掲げて経済重視の内政主義を打ち出し、「高度成長」に拍車をかけ、日本は「経済的季節」に邁進していく。このような全国的好景気のなかで、大阪地元の有力紙『大阪新聞』では、戦後大阪の経済復興、交通機関の整備、土地の開発をめぐって大きく報道していた。その中で注目したいのは、1959年末から同紙第二頁で連載されはじめた『大阪商人太平記』である。

作者は宮本又次（1907-1991）、大阪生まれ、当時大阪大学の歴史教授を勤めていた。宮本は

---

5) 文末の一覧表を参照のこと。

それまで『大阪町人論』『風土記大阪』『船場』などの著書において、大阪の地誌、商業、風土、人物を多年に亘って研究し、大阪の文化、すなわち「町人根性の持つたくましさ」を広く発信する。そして宮本が「この根性のたくましさは戦後真の市民精神にまで脱皮して、昇華する」と希望するように、戦後民主主義の徹底がその問題意識の所在である<sup>6)</sup>。『大阪商人太平記』においても、このような姿勢は変わっていない。「大阪に点検の場をもとめて、企業史へのアプローチを試み」、「大阪人気質の本質をこうした方面からも浮き彫りにしよう<sup>7)</sup>」との趣旨の通り、『大阪商人太平記』は近代（明治・大正）における大阪の商業活動や商人伝記に焦点を合わせ、大阪の伝統的な町人文化をアピールする。それが「大阪第一主義」を掲げた『大阪新聞』で載せられることはまことの都合のいいことである。事実、同書は1959年年末から1960年にかけて計二・三回にわたって連続発表されただけでなく、1961年から翌年まで「続大阪商人太平記」と題して計二七〇回も連載されていたことが分かる。『大阪新聞』において、新聞小説の連載回数を超えるほど空前の規模である。「経済的季節」を歩み始めた『大阪新聞』は、このような伝統（町人文化）と近代（商業活動）そして現代（戦後民主主義、高度成長）の連続といった歴史的・地域的特徴があった。

このような背景で、1962年『大阪新聞』第二頁の『大阪商人太平記』が終了し、引き続き同じ紙面に登場してきたのがほかでもなく司馬遼太郎が多数寄稿した「世相アラカルト」コラムである。「世相」とは、世の中のありさま、社会の様子であり、「アラカルト」とは、食堂などで客が自由に選んで注文できる一品料理という意味である。題名から見れば、「世相アラカルト」コラムは、寄稿側と読者側の自由性、および「現在」という時代性が強調されるという点において特徴が挙げられる。また、「大阪商人太平記」より紙面が大きく広がり、「世相アラカルト」は新聞紙一頁の五分の一を占め、挿絵もついており、人を引き付けるような新たな設計である。コラムの全体については、次の統計表にまとまっている。

寄稿者氏名	生没年	職業	寄稿数	割合	主な内容
①藤 浦 洸	1898-1979	詩 人	29篇	15%	田園生活、スポーツ
②丸 尾 長 顕	1901-1986	演 出 家	33篇	17%	恋愛、女性
③司 馬 遼太郎	1923-1996	作 家	33篇	17%	日本旅行、若者
④福 田 蘭 童	1905-1976	随 筆 家	34篇	17%	海外旅行、釣り話
⑤オーティス・ケリー	1921-2006	同志社大学教授	18篇	9%	日本旅行、異文化体験
⑥木 暮 実千代	1918-1990	俳 優	5 篇	3%	職場話
⑦轟 夕起子	1917-1967	俳 優	9 篇	5%	マスコミ
⑧陳 舜 臣	1924-	推 理 作 家	20篇	10%	推理小説、教育
⑨堀 内 方 子	不 詳	デ ザ イ ナ	16篇	8%	ファッション

6) 宮本又次『大阪町人論』（ミネルプア書房、1959）p 3

7) 宮本又次「はしがき」『大阪商人太平記』「明治後期篇（下）」（創元社、1963年）

寄稿者はほとんどマスコミ関係者で、当時活躍した社会名流である。テレビをはじめとするマスコミの急速な普及が反映される。合計197点の寄稿は、テレビ、流行文化、価値観の紹介（②⑥⑦⑧⑨）、及び観光体験談（①②④⑤）という二種類に分けることができる。話題は大阪にとどまらず、関西地域、日本全国さらに海外まで広がることが分かる。高度成長を歩む時期に、『大阪新聞』の編集者たちは、新しい社会生活様式の紹介、及び観光経済の活性化といった趣意で「世相アラカルト」コラムを立ち上げたと推察する<sup>8)</sup>。執筆者はほとんど年上だが、司馬はほぼ週一点の頻度で、合計33点の文化評論を書いた<sup>9)</sup>。寄稿者の中では上位である。1961年新聞記者をやめたものの、それまで『大阪新聞』の文化コラムを企画してきた司馬は、『大阪新聞』にかなり信頼されたことが分かる。

## 第二節 「世相アラカルト」における「反世相」

1960年代前半、高度成長は社会生活様式に巨大な影響を及ぼす。テレビをはじめとする耐久家電製品は急速に社会に普及し、人々は日常の労働から解放され、いわゆるテレビブーム、レジャーブームは当時の流行語となった。と同時に、ライシャワーなどのアメリカ政治家、学者が提唱した「近代化論」を念頭に置けば、1960年代前半はまさに西洋価値観の流入、物質文明が高揚する「消費社会」「近代化」の時代であった。

ところが、社会は向上するものの、司馬は変哲もなく、淡泊な日々を送っているようだ。その言葉を借りれば、「趣味道楽というものは才能がいるもので、私などは、酒座を愉快にする術をもたず、歌舞音楽はできず、運動神経はさして無く、書画コトウに執着できるほどの眼識がなく、人と勝負をあらそって十度に三度は勝てるほどのバク才もない<sup>10)</sup>。テレビを購入しても、「最初の一日は、それをつけたり消したりして楽しんでいたが、だんだんばかばかしくなって、その後半月ほど、置きっぱなしになっている」。ボーナスを手に入れても、「そういいながら私は戦後十四年ばかり勤めて、その間、ボーナスは二十八回はすくなくとももらったはずだが、なんの思い出もないことに気づいて、われながら驚いた」と生活態度の地味さに幾分自嘲めいた口調だが、司馬は急速に発展した社会と距離をとり続けている生活態度が分かる。では、司馬はどのような思惑で「世相アラカルト」コラムに寄稿したのだろうか。コラム開始早々の「萩の宿」に注目したい。

---

8) 観光経済の活性化という編集者の意図について、「阿波は、阿波おどりのほかは観光資源のとほしいところで、数年前に土地の智者があつまり、「城よりも、狸を宣伝しよう」という司馬の証言がある。司馬は「狸の分野」を執筆する時、その配慮を念頭に入れたに違いない。「狸と泥棒」『司馬遼太郎が考えたこと2』（新潮社、2001）p43、初出『週刊文春』第三卷第四十六号1961年11月

9) そのうち4点がすでに『司馬遼太郎が考えたこと2』に収録されている。

10) 「作戦要務令——悲劇はもう一度おこる」『大阪新聞』1962年12月11日

武家屋敷が残っており、まだ人がたくさん住んでいる。市内に交通信号は一か所しかなく、町でめだつほどの煙突はあわせて三本あるのだが、いずれも銭湯のそれで、工場というのは一棟もない。雲が美しく、町は洗われたような清潔で、古雅で、まるで封建時代の城下町をビンヅメにして保存してあるような都市である。

高村さん、というのが宿の係りの女中さんだったが、年頃は五十五、六で、大阪の城下町の住人にだけみられる典雅さと明るさをもった人で、身ごなしや言葉のはしばしにどこことなく三百年の都市文化というものを感じさせる。こういう人からみれば、風景の変遷の激しい大阪、東京の人種などは、ひょっとすると大田舎者ではないかともおもわれる。つまり、いわゆる都会人などは、着ているものがそのもの流行服というだけのことで、中身には、厳密な意味での文化の折り返し目がついていないようにおもわれるのだ。

(中 略)

まったく、この欄で紹介するには、あまりにも「反世相」的なはなしで恐縮だが、都会の薄っぺらいアンチャン文化だけが世相でもなく文化でもないと思うのである。

世の中には、いろんな人がいる。週刊誌の中間読物にのっている連中だけが日本を構成しているのではない。日本の社会は、これはこれで、じゅうぶんにおの厚さをもった社会だということを、わざわざ長州萩まで行って知らされた。<sup>11)</sup>

「都市としての発展がまるでストップしてしまったような町」を訪問した司馬は、町から一歩も出たことのない女中さんの「典雅さ」「明るさ」に感心し、「三百年の都市文化」という日本社会の「おの厚さ」を知ったという旅の体験談である。その翌年女中さんについて「一隅を照らす人こそ、国の宝だ」と再び評価しており、萩の旅行は印象的なものであった言っている<sup>12)</sup>。「都会人などは、着ているものがそのもの流行服というだけのことで、中身には、厳密な意味での文化の折り返し目がついていない」と指摘することから、司馬は彼の「風神」時代の価値構造、すなわち「中核」と「表面」という観念を踏襲していることが分かる。ただ、「風神」時代に「表面」で横行した政治に、「流行文化」が取って代わったのである。ここで、流行文化と伝統文化との連带的関係から歴史と現在の一体感を訴えるというのが、司馬が言わんとするものであろう。

だが、流行文化の実態は司馬の理想とかけ離れている。司馬は「都会の薄っぺらい」アンチャン文化は「おの厚さをもった社会」が表現できないとし、それは「世相でも文化でもない」と指摘する。そこで、流行という表面のみ注目され、その内実であるべき伝統が無視されるという不満があった。司馬の「風神」時代を想起すれば、50年代前半において、司馬は伝統文化の復帰に対して大いに期待していたものの、60年代前半に入ると、伝統文化自体の喪失に懸念

11) 「萩の宿——古い城下町の女」『大阪新聞』1962年8月17日

12) 「お種さん」『司馬遼太郎が考えたこと2』pp.235-237、初出『婦人生活』第十七巻第二号、1962年2月



を抱えるようになった。そのため、司馬は当時の流行文化や新たな生活様式に対して、一向批判的な態度を取っていた。以上のような自己主張と現状認識との格差において、司馬は敢えて「反世相」という趣旨を表明した。流行文化や価値観を宣伝する「世相アラカルト」では、かなり異色な発言であろう。

レジャー・ブームというが、人間まったくヒマになると、なにを考えたすかわからない。狸は自分でシワをのぼしているが、人間はわざわざ他人に金をはらってシワをのぼしてもらっているのである。

「まったく退屈ブームだ」

と感心してしまったが、人間は退屈がコウじてくると、いよいよ自分に対する関心が病的になってくるものらしい。

占いのブームなども、その一つだ。自分の性格や運命を他人に教えてもらって悦に入っている。

いろんな健康療法がはやるのも、人間の強烈な自分への関心につけ入ったものだろう。ヨガの流行が、いい例である。<sup>13)</sup>

「占い」「健康療法」「ヨガ」の流行といったレジャー・ブームは、司馬にとって不可解なものである。「ヒマ」や「退屈」といった内実のない状態から育てられた「自分に対する関心」は、「病的」になるだけの話である。精神空洞化した流行文化は、伝統と結びつけず、司馬の批判の対象になるのも当然なことである。淡泊な生活態度、流行文化への批判から、司馬の意識の根底には、近代化がもたらす物質文明の氾濫に対する反発があるだろう。

### 第三節 幕末と「保守精神」

周知のように、1960年司馬は通俗文学の登竜門と言われる直木賞を受賞し、翌年小説を専念するために産経新聞社を退社した。それから司馬は、一、二年間ぐらい探偵小説、戦国を題材にした歴史短編小説を執筆し続けた。注意したいところに、1963年から、司馬はそれまで扱っていない「幕末」に惹かれ始めたようだ。『竜馬がゆく』をはじめ、『新選組血風録』『燃えよ剣』といった幕末を舞台とした長編歴史小説はすべてこの時期の作品である。

司馬の代表作『竜馬がゆく』を例として挙げてみよう。『竜馬がゆく』は1962年6月から1966年5月にかけて、約五年間で『産経新聞』で連載されていた。その誕生の経緯について、小林竜雄は司馬の個人的理由二点を挙げた。すなわち、司馬が当時住んでいた「マンモスアパート」

13) 「狸の分野——退屈がこうじると」『大阪新聞』1962年12月20日

という集団住宅地は、土佐藩の蔵屋敷の跡地にあること。そして、高知県出身の知人に頼まれ、産経新聞社社長の同意を得たことである<sup>14)</sup>。時代的背景について、小林は司馬が「明治百年」を意識していたと指摘するが、筆者は当時の司馬には、明治への感覚はまだ早すぎると考える。『竜馬がゆく』を構想、執筆する際、司馬は「明治」あるいは「明治百年」に対する言論はなかったようだ。確かに当時司馬は「百年の単位」「めでたき百年」といった文章を残したが、「くだって幕末争乱の最絶頂期というべき元治元年が、ことしをもってかぞえると満百年になる」と述べるように、「百年」はむしろ「幕末」を記念する意味で使われていた<sup>15)</sup>。このように、幕末の小説を手がけることによって、司馬は「幕末史」という新たな領域に立ち入ったのである。

最も、司馬の歴史小説へのこだわりは60年代に始めたわけではない。早くも1956年に、司馬は「正しい史観と資料をそなえたものでなければ、もう読者も食いつくまいというのが本筋の見方だ」と自分の歴史小説の作法と気負いを述べたことがある<sup>16)</sup>。幕末を主題とした歴史小説を構想するため、司馬は資料を網羅的に収集し、特に京都にある史跡を丹念な調査をしていた。その創作経緯について、『司馬遼太郎が考えたこと』ではあまり紹介されていないようだが、ちょうど同じ時期に登場した「世相アラカルト」における寄稿は、司馬の取材ぶり及び生な感想を披露する貴重な資料である。「寺町雑感——ド根性のいやらしさ」において、京都の先斗町にある幕末尊皇攘夷家の本間精一郎の遭難地を訪れ、司馬はその感想を述べた。

木屋町へ出るために、三十九番露次をぬけ通ったが、途中、京格子のふるい家がならんでいいる。出格子の柱に、刀傷が四点ある。一点は切りこんで二寸ほど。あとは、そぎおとして三寸ほどのきずをのこしている。幕末の剣戦のあとである。

文久二年八月二十日の夜、越後浪人本間精一郎が、先斗町三条下ル「近喜」に登楼し、すぐ□授をつれて外へ出た。雨傘で身をかきし、わざと酔ったふりした。すでに刺客があ

14) 小林竜雄「『竜馬がゆく』誕生秘話」『司馬遼太郎が書いたこと、書けなかったこと』（小学館、2010）p16

15) 幕末という時代を扱う現実的理由について、「めでたき百年」では次のように述べる。

「百年目のいまの池田政府はどうか。信長のころの足利政府や、元治元年当時の徳川政府からみればずいぶん堅牢な政府であることはたしかである。

当時の幕府の閣老の多くは、徳川家や日本の安危を考えるよりも自家の保身、派閥抗争でその日暮らしをつづけていた。その点は似ている。

ただ社会が成長している。政治家が少々コップのなかで遊んだり騒いだりしていたところで、日本の社会の各分野が、強靱に日本を担当するまでに成長している。

この点、歴史は変わった。泰平めでたき百年目というべきであろう。池田さんよ。」

「めでたき百年目」『司馬遼太郎が考えたこと 2』（新潮社、2001）pp.306-308、初出『毎日新聞』夕刊1964年1月10日、「歴史は変わった」と述べるように、司馬は幕末と今の日本を比較し、戦後日本の社会性を強調した。1960年代前半という激動期に池田勇人政権、特に貿易自由化政策は「自家の保身」にこだわらず、いかに社会責任を担ってくれるかという新たな問題意識があった。司馬の社会論については、本論文の第七章「司馬遼太郎と世代論」を参照のこと。

16) 「歴史物の流行」『大阪新聞』1956年1月12日



るとをつけていることを知ったからである。本間は京都のいわゆる勤王の志士のなかでも秀抜な理論家で、しかも議論をはじめれば相手を屈服させねば気のすまぬ性格があった。相手はつねに、議論を失なうと同時に名誉をも失なった。自然、同志から憎まれた。デマがねつぞうされ、佐幕派の公卿に近かづいているといううわさが立った。

当夜の刺客は、人斬りの異名で知られた薩摩の田中新兵衛、土佐の岡田以蔵らである。

この三十九番露次で前後から刺客にかこまれ、激斗した。狭い。それだけに本□にとってやや優位であったが、途中刀がソツバモトから折れ、斬られた。

そのあとが、平然とまだ残っている。平然と、といったのは、町民がべつに改造もしないというだけのことである。出格子は、きれい好きの京都人らしく、いつもきれいにみがかれている。それも、住まいを□□にしておくというだけの動機で、磨いていくらか金をとるという魂胆ではない。

京都には、そういうおそるべき保守性がある。これが、町の美しさの秩序を破壊からまもっている。これはパリでもそうであろう。<sup>17)</sup>

幕末小説を念頭に置きながら、「出格子の柱にある刀傷」を目撃し、激動した幕末という歴史的現場に立ち会った司馬は大いに満足したようだ。伝統文化の保全に固執する「京都のおそるべき保守性」を褒めたわけである。『大阪新聞』への寄稿のため、司馬はただ単に京都を褒めるだけではない。司馬は文章の中心である大阪に話を移した。そこに、京都の「保守性」に反して、大阪の「ド根性」が挙げられた。

大阪はちがう。

全市、破壊の魔人のようなものだ。大阪の都心部の緑地帯は、寺町のあたりだけだったが、いまはむざんなものだ。

昨日、人がきた。町で写真を撮りたいという。同行して寺町の源聖寺坂をのぼった。この石畳みの坂は、私の中学のころ五年間往復したところだからかつての記憶がある。大阪でも最も美しい坂の一つである。

それが無残にやぶれている。両側の寺が、土地の切り売りしているせいである。寺の境内地は、宗教目的以外には使えないことになっているのだが、いまの僧侶には、道心どころか、遵法精神もないのであろう。

坂をのぼりきって、寺の塀のつづくあたりに出たのだがあ、このあたりの寺の俗□無類の風景ときたら、ちょっとすご味がある。

なにかの理由で古い美をすてねばならない場合は、こういう機能第一主義の都会ではじ

17) 「寺町雑感——ド根性のいやらしさ」『大阪新聞』1963年3月26日

ゆうぶんありうるのだが、それはいい。破壊もいい。が、美をつくりだすための破壊ならいいが、なにも生んでいない。醜（みにく）さだけがそこにある。

これが、われらが町、大阪のド根性というものだ。ド根性のいやらしさを見ようと思えば、寺町で散歩されることをすすめる。おそらく市民としての自己嫌悪を感じることなしに、この町を廻りすぎることはできない。<sup>18)</sup>

近世から「天下の台所」と呼ばれた大阪では、大阪商人が経済活動に長じるという伝統はよく知られている。大阪は空襲の焼け跡から著しく復興、高度成長を遂げたのは、このような伝統が働いていると言われる。その伝統を認めた司馬は、大阪を「機能第一主義の都会」と呼称した。ところが、司馬は60年代前半の町の変化を目撃し、大阪人の「ド根性」は寺町といった「古い美」を破壊する恐ろしい力に変わっている、と皮肉る。『大阪新聞』において、常に自己の郷土愛や地域主義を主張してきた司馬が、大阪を批判するのは異例であろう<sup>19)</sup>。

最も「破壊」という行為自体に対して、司馬が怒りだけを感じたわけではない。例えば50年代前半司馬は無頼派と言われる坂口安吾の作品に大きく感銘を受け、「徹底的な破壊と墮落の向うに見える絶対自由の浄土を夢見ながら、ムラがる敵をバツバツとなぎふせて行った」と坂口の破壊精神を絶賛したことがある<sup>20)</sup>。空襲によって焼け跡になった大阪の土地において、司馬は新たな未来を期待していた。その一方、司馬は大阪人の「ド根性」そのものを否定するわけでもない。例えば、大阪の布施、十三地域の経済復興を見た司馬は、「市内で商売をしていて失敗をすると、尼崎、十三、布施に落ちのびたそうだ。つまり、大阪の平家村のようなものである。そこで何年か安い家賃で辛抱し、機が熟すとふたたび市内にのぼってきて商売の旗をたてる。それが、大阪ふうな土根性だったのだろう」と大阪人の強靱さを評価した<sup>21)</sup>。

司馬の問題意識は「あまり発展が急速だったために、じつにややこしい町になってしまった」という言葉にある。つまり高度成長初期において、「経済至上主義」に走り、経済と文化のバランスが崩れかけた大阪に対する不安である。このような現実認識において、司馬は「町の美というのは、それを創るためには大胆な破壊精神も必要だが、それだけなら、じゅうぶんではない。それを守る強烈な保守精神が必要である」と、自分の「保守精神」を初めて表明した。

---

18) 同掲注17

19) 拙稿『『風神』時代の司馬遼太郎——1950年代前半の文化論をめぐって』『東アジア文化交渉研究』開設記念号、2012年3月。最も同時期の文献を照らしあわせてみれば、司馬が経済活動に長じるという大阪人の性格を評価する箇所が見当たらない。筆者が参考したのは『司馬遼太郎が考えたこと2』（1961-1964）（新潮社、2001）である。

20) 「坂口安吾の死」『大阪新聞』1955年2月19日

21) 「布施と十三——町の盛衰」『大阪新聞』1962年9月5日

#### 第四節 内省の姿勢

京都の保守性を高く評価する司馬は、京都を批判することもあった。「碑について——歴史を忘れた日本人」という文章において、司馬は史跡探訪の不愉快な経験を披露した。訪れた場所は京都河原町の繁華街にある史跡、明治維新の策源地である薩摩屋敷だった。毎日大勢の人々が薩摩屋敷のそばを通りかかるが、記念碑が建てられていないため、誰一人も意識することができない。史跡を管理するはずの関係者は、その調査を学生アルバイトにやらせているという。司馬は市役所の「いい加減さ」に大いに憤慨し、次のように批判した。

戦後、観光京都でさえ史跡碑がたたぬ、というのは、これは、われわれ日本人全体の不幸に根ざしている。

われわれ日本人は、明治以降、終戦まで、ばかげた水戸学派の尊王攘夷史観の国史教科書を教えこまれ、終戦後、米軍の軍政者がそれを捨てさせると、こんどは大あわてで日本史そのものも捨ててしまった。この日本の珍事は、地球つづくかぎり人間文明史上の最大のコッケイ事件として記録されるべきだ。

もっとも、この滑稽はなおも続いている。学校ではなお堂々たる態度で日本史は講じられておらず、日本史といえばヤヨイ式土器と米騒動のようなものだ、という印象だけで生徒たちは社会に出てゆく。

歴史感覚がない、ということは、文明感覚がない、ということで、現代人としてはもっとも応ずべきことなのである。私は、日本が最近繁栄をとりもどしたが、なお戦後の荒廃のまっただなかにあるといたいのは、歴史をわすれていることである。

なにも、史跡に石を一つ置くことが、歴史でも文明でもないが、市民がそれを愛している証拠にはなる。すくなくとも、効用としては、それを通りすぎる人にその巨大なものを考えさせる契機にはなる。<sup>22)</sup>

保守性を誇る京都自身でも、史跡を軽率に扱う態度が見えるということで、司馬は京都の「歴史感覚の喪失」に失望した。実際に、「この民族は、『歴史』を喪った」という認識は、早くも十年前に明白に出た<sup>23)</sup>。ここで「戦後、観光京都でさえ史跡碑がたたぬ、というのは、これは、われわれ日本人全体の不幸に根ざしている」と指摘するように、司馬は「歴史の喪失」が戦後日本を貫く根本的問題として認識したのである。

終戦直後の日本人の「歴史の喪失」の要因について、司馬は「われわれ日本人は、明治以降、

22) 「碑について——歴史を忘れた日本人」『大阪新聞』1963年1月19日

23) 「歴史物の流行」『大阪新聞』1956年1月12日

終戦まで、ばかげた水戸学派の尊王攘夷史観の国史教科書を教えこまれ、終戦後、米軍の軍政者がそれを捨てさせると、こんどは大あわてで日本史そのものも捨ててしまった」と述べた。この言説は司馬の戦後認識を示す極めて重要な表現として注目すべき言葉である。アメリカの支配により、いわゆる「皇国史観」的な日本史の叙述と健全たる日本史と、味噌もクソも一緒に処分されてしまったという。戦後民主主義改革の強行により、戦後の歴史教育は「封建か封建でないか」という「史的法則」で行われ、「民族の史詩」を伝えることができない、という司馬の時代認識があった<sup>24)</sup>。アメリカの支配という外部から押し付けられた民主主義改革に対して、司馬は強烈な不満を持っていた。

以上の言説を繰り返して検討れば、この言説には司馬の思想にある微妙な展開が潜んでいる。「尊皇攘夷史観」に触れた箇所と、そして幕末という新たな時代を注目し始めた司馬の事情を考えれば、ここの言う「日本史」は「日本近代史」と特定した文脈がある。「学校ではなお堂々たる態度で日本史は講じられておらず、日本史といえばヤヨイ式土器と米騒動のようなものだ、という印象だけで生徒たちは社会に出てゆく」と、「古代史」にこだわった歴史教育の「滑稽さ」を指摘した。60年代に入り、日本本土においてアメリカの支配が終結し、経済復興を遂げた。それなのに、学校教育は自ら「日本近代史」に触れようとし、あるいは自ら記念碑を立てなく、歴史感覚を喚起する意欲さえ見られない。それらの現実、司馬にとって理解に苦しいものであった。この時点で、アメリカなどの外部からの敵を想定するよりも、経済成長に伴う問題点という日本「内部」から問いはじめる、すなわち「自省」という司馬のスタンスが微妙に変わっているのだ。

幕末小説の取材を通じて、司馬は様々な資料を調べた。その中に、彼が最も賞賛したのは文倉平次郎の『幕末軍艦咸臨丸』である。同書は昭和十三（1938）年出版され、分厚い歴史研究書である。著者の文倉は大学の教授でもなく、一定年社員であった。咸臨丸に属する日本水夫の墓が米国で発見され、そのきっかけで文倉は「生涯の事業」として同書をまとめたという。司馬は次のようにコメントした。

好事家が書いた歴史というのは、視野がせまく、えてして主観的なものだが、この書物は、大学の史学の教授でもこうはいくまいと思うほどの客観的姿勢をとり、資料の取捨選択は厳正であり、かつ、文章はきわめて平明である。しかも自分が生涯をかけた咸臨丸への愛情にみちている。日本史のなかでその船名をとどめながらしかも資料はほとんど壊滅していた咸臨丸はこの名著によって浮かばれた。<sup>25)</sup>

『幕末咸臨丸』は非常に信憑性のある歴史研究書だという。司馬はあまりにも気に入ったらし

24) 「忠臣蔵」『大阪新聞』1954年10月21日

25) 「幕末軍艦咸臨丸——名著によってその名永遠に」『大阪新聞』1963年3月12日

く、それを「男子の偉業」として絶賛した。勝海舟や幕末海軍を描いた『竜馬がゆく』は、同書が多いに参考になっただろう。

筆者も実際に同書を調べた。1938年に海軍をモチーフとした同書の出版は、確かに「非常時」すなわち戦争勃発という特殊な時代背景と関係なくもないが、「非常時」のイデオロギー、例えば「国民精神総動員」のような表現は一切出ていない。同書は「皇国史観」的文脈も見当たらない純粋たる歴史研究書である。出版物が厳しい統制に置かれた時代において、同書は珍しいケースと言えよう<sup>26)</sup>。

ともあれ、資料を大量に集め、それらを取捨選択した上に、司馬は「厳正」たるつもりで『竜馬がゆく』などの幕末小説に取り掛かった。その結果、司馬は幕末史の激動した時代精神と出会い、幕末史に多いに魅了されたという。1966年『竜馬がゆく』が完結した際、司馬は評論家の大宅壮一と次のような対談が行われた。

大宅：ひとつ、外国へでもいってみませんか？

司馬：それ、自分自信に異論があるんです。

大宅：イメージがこわれる？

司馬：ウーン。そういうことですね。

大宅：蒙古語を専攻されましたね。蒙古なら、どうです？

司馬：いってもいいです。

大宅：かつては、憧れたんでしょう？

司馬：いまでも、ものすごく憧れてますよ。けれども、小説の世界では外国に興味ありません。ぼくがいま、いちばんおもしろいのは、日本と日本人です。

大宅：あなたがねらっているのは、日本でもいちばんおもしろい時代でしょうね。

司馬：ぼくは抽象的な人間なんです。外国人のような目で、見物し歩いている……。なんていいますか、立場がそういう……。

大宅：ニッポン見物旅行だな。

司馬：そいつに、いまのところ熱中しています。ちょっと外へは関心が向きませんね。<sup>27)</sup>

それまでモンゴルに憧れていた司馬は、『竜馬がゆく』などの取材により、外国への関心さえ向かなくなり、日本、日本人と国内旅行だけに熱中していると言う。以上の言説は、第三節で触れた保守精神をそのまま反映しているように思える。60年代における保守精神の顕在化は日本全体としての「歴史感覚の喪失」という時代認識、そして幕末小説取材に伴った日本近代史

26) 文倉平次郎『幕末軍艦咸臨丸』（巖松堂書店、1938）

27) 「竜馬が生きていたら三菱財閥をつくった」『大宅壮一全集 第十五巻』（蒼洋社、1982）pp.155-156、初出『週刊文春』1966年9月5日号

への自らの探索と深く関わっているのである。

## 終わりに

高度成長期を歩み始めた『大阪新聞』の「世相アラカルト」コラムから、司馬が執筆した29点の新資料が確認され、『大阪新聞』は司馬にとって重要な存在であることが再び証明された。「世相アラカルト」において、司馬は他の執筆者と異なった「反世相」の立場を打ち出した。司馬は60年代前半の急速な経済発展、土地開発に危惧を覚え、文化と経済とのバランスの崩壊を意識したからである。そこに、「歴史の喪失」がなお戦後日本二十年間を影響し続ける深刻な社会問題として認識された。このような時代認識から、彼は「破壊精神」よりも「保守精神」が必要だと、自分の「保守精神」志向を初めて表明した。

もっとも、司馬の「保守精神」は60年代に生まれたのではない。少なくとも十年前の50年代に、司馬の戦後民主主義改革を批判し、そのような志向が見え始めた。60年代前半における新たな時代認識、それに自分の幕末小説の取材をきっかけに、司馬の「保守精神」は顕在化した。その「保守精神」は「日本近代史」に焦点を当てる傾向が見え、外部を批判するのではなく、内部を「自省」する姿勢を取り始めたのである。個人史的な意味では、「保守精神」の顕在化が、司馬における戦後文化ナショナリズムの大きな展開と言えよう。

橋川文三は「日本保守主義の体験と思想」において、「進歩史観」という「戦後日本特殊な知的伝統」について検討したことがある。50年代民主主義、マルクス主義の文脈において、「保守」は常に「進歩」の対立面、すなわち「反動」「反革命」というイメージに結び付けられる。60年代の高度成長期に入り、イデオロギー闘争が下火になっているが、経済好調を裏付ける「近代化論」の文脈においては、「保守」が「経済」の対立面に置かれ、否定的に語られていたという<sup>28)</sup>。もしそうであれば、60年代前半司馬が自ら「保守精神」を表明するのはかなり異色であろう。

司馬は幕末小説を創作することによって、幕末史を猛勉強したこと述べたが、幕末に継ぐ「明治」をまだ完全に視野に入れていないようだ。「われわれ日本人は、明治以降、終戦まで、ばかげた水戸学派の尊王攘夷史観の国史教科書を教えこまれ、終戦後、米軍の軍政者がそれを捨てさせると、こんどは大あわてで日本史そのものも捨ててしまった」という言葉を今一度見てみれば、司馬が明治を依然イデオロギーに縛られた時代と捉えたことが分かる。本論文第七章で検討したように、60年代前半の司馬は決して「明治」を「明るく」見ていなかった。「明治」という時代を問題視したのは、明治維新を舞台とした『坂の上の雲』を待たなければいけない。

28) 橋川文三「日本保守主義の体験と思想」『戦後日本思想大系7』（筑摩書房、1968）pp.8-46



## 「世相アラカルト」コラムにおける司馬遼太郎の寄稿（合計33点）

1962年 8月1日	ガタロがない——だからコドモがギセイになる
8月8日	コレラの今昔——死にかかった初代英大使
8月17日	萩の宿——古い城下町の女
8月22日	鉄砲と自動車——昔の若者はこれで泣いた
8月29日	この娘を見よ——父が療養者ならいけないか
9月5日	布施と十三——町の盛衰
9月11日	村の恩師——同窓生、オトナ面忘れる
9月19日	山やくざ——人口過剰の悲喜劇
9月27日	変な置き物——この不便なもの“テレビ”
10月5日	年忘れ——気の若い時代※
10月12日	ある結婚式——この古く新しい若者たち※
10月19日	読史余談——丹羽長秀の切腹※
10月26日	若いものは悪いか——愚かな世代論※
11月1日	えらいやつ——T君の硬骨
11月9日	無線アンマ——「宇宙アンマ」とハナ高く
11月16日	戦車と貿易自由化——池田さん、大丈夫ですか
11月23日	団右衛門会社——そっくりのイノシシぶり
12月4日	ボーナス——どうも印象がキハク
12月11日	作戦要務令——悲劇はもう一度おこる
12月20日	狸の分野——退屈がこうじると
12月28日	ああ、わが社会党——そんな高い本は買えません
1963年 1月9日	煙霧へのノロイ——星がみえない
1月19日	碑について——歴史を忘れた日本人
1月23日	経営者と無能——珍奇きまわる事件
1月29日	市長さん——その名も知らない
2月6日	ある終戦っ子——えらい子ができた
2月13日	医学時代——自己診断過剰
2月19日	走る、飛ぶ、服装——生命をあずかる人の場合
2月26日	腰が抜けている——もっと体力がほしい
3月5日	風景の賊——わがもの顔の像
3月12日	幕末軍艦咸臨丸——名著によってその名永遠に
3月19日	落第回顧——東北で味わった悲痛感
3月26日	寺町雑感——ド根性のいやらしさ

※はすでに収録されている作品である。